

併し之は畢竟一種の習慣なれば矯正せられぬ事は
ない。樂界の風潮が其方面に向へば、皆競うて高
聲を發するやうになるに相違ない。之を要するに、
音樂の中でも、女性の學ぶに適當であり、且効益
多しと思はるるは、器樂よりも聲樂に屬するもの
なれば、斯道を研究せんとする女子は成るべく此
方針を採るやうに勸めたいと思ふ。



▲いづれか眞の幸福 (佐治實然氏)

私の生國に伊賀安太郎といふ人がありまして、一時衆議院議員にもなつたことがあります。此人は不幸にして終りを金ふせずして段々貧乏して死んだ。其人の未だ金持で田舎に居つた頃には大百姓でしたから、奉公人が男女取雑で五人も七人も居ります。丁度田舎で夏休みをして居ました日で團子を拵へて下人がシタ、カ食へて居る、其處から一間二間隔つた上の間で主人が蒲團の上に坐つて茶碗に眞白なお粥を入れて向ふに鯛の刺味か何かあつてテリ焼などが付いて御飯を食へて居るところで、其時聽いた話が面白かつた主人が云ふのに下人共はアノ通りまづい團子でもシタ・カに食ひますが、アレで晩に饅頭を拵へますと又澤山食う、ア、云ふ風に働く奴等はどれだけ食うて置いたら腹がへらないだらうと云ふことを何時も念頭に置いて食うて居るやうですがそれでも直にへつてしまふ、私は此の通り粥を一口ぐらゐづゝ入れるのを二杯と、刺味を漸く一切か三切くらゐ、それで何分腹がへらない、膳に向ふときどのくらゐ食つて居つたらへるだらうかと何時も腹のへることを考へる大層な違ひですと云ふ話でありました。其後殆ど三十年或る機會に觸れ或る折に觸れて常に私は其話を思ひ出す之が所謂今日の文明的紳士の生活と田園生活とを代表して遺憾なく現はされて居るところ、人生眞の幸福は此兩者いづれにあるでしやうか(新公論)